

後嗣 弘 939  
#1(4) 282, 宇治 167 紀上 320  
紀上 320 5行 312 末へ

記(四)  
173

898 P

仲哀2年 皇位にのり  
後 8行へ  
足利と和 322

3031  
紀上 608 左下  
紀上 330  
27行 此

と解釈してみたい

# 第十一章 仲哀天皇

仲哀天皇は、小碓尊(日本武尊)の第二子

である。(景行紀・仲哀紀参照)

日本書紀に(仲哀紀の冒頭)は、

成務天皇に男の御子が無かったので、

嗣者として仲哀天皇が皇位を受け継いで即位された

と記されてゐる。

しかし、古事記に

成務天皇は、穗積の臣等の祖である建忍

山垂根の女、弟財の郎女を娶って、和訶奴気

の王(一柱)をもうけた

と記されてゐるから、男の子が有ったことに

なる。(日本書紀) (山) 日本古典文学大系、

岩波書店、三二〇頁、注一二(参照)

和訶奴気の王は、早世されたのだから

ともあれ、日本書紀に古事記の双方の

記事が正しいのか、それともどちらかが誤っているのか、詳細は不明である

さて、この物語では

仲哀天皇は、即位より以前、琵琶湖東岸

の息長(近江坂田郡の地名)に地理的に相当

する所、博多湾東岸の香椎(南)の気長宿禰王

の女、気長足姫尊(後の神功皇后)を娶らされた

帝國地名辞典「太田為三郎、名著出版(息長)へ沖濱(息長)」

紀上 282 末 3行

25

593

ケ-20 20x20  
紀上 330 3行

「福岡県の歴史」史「平野邦雄、山川出版社、二〇〇二頁

「食彦」

日本書紀(上) 日本古典文学大系、岩波書店、六〇八頁補注八一ニ

かみ 檀日清 紀上338<sup>?</sup> 見長 云1102<sup>?</sup>

尚、倭王の血筋を引く気長宿禰王は、天日槍を祖先に持つ葛城高額比売命を娶り、気長足姫尊をお生みになつた、という。(第一表

開化記、神功皇后摂政前紀の冒頭参照)

つまり、気長足姫尊には、玄海灘の北方の

扶余系殷民の血が濃厚に流れていたといえよう

仲哀二年(一九三)正月十一日、仲哀天皇は

気長足姫尊をお立てになつて皇后とされた。

二月六日、仲哀天皇は、敦賀に相当する

所山香椎に行幸され、行宮を建ててお任りに

なつた。檀日宮

なお後代、香椎に相当する所「敦賀」

檀日宮に相当する「筭飯宮」を建てたのであ

らう、と考へてみた。この所は、

檀日宮とあまりにも異様であり、

紀から離れすぎている感は否めない。

しかし、倭国三十余国が北九州・山口地方

にあつたらうと解釈するとき、琵琶湖東岸の息長

や、北陸の敦賀は未だ異国の一地方にすぎず

仲哀天皇や神功皇后の時代の倭国の歴史

東・西の戦闘に決着がついていない当時

12.5 GM

檀日宮

倭国

いん 云 香む 142<sup>?</sup>

紀上617<sup>?</sup> 231 899<sup>?</sup> 紀上322<sup>?</sup>

紀上322<sup>?</sup> 宇治宮上168<sup>?</sup>

557, 10, 17<sup>?</sup> 43.8.17 清和

紀上330<sup>?</sup> 記(四)132<sup>?</sup>

H18(2006)8.16 紀上 323' 行 11  
902' 宇治谷 169'

つばせりあり 鎧(合)云 1495' とうい 轉 2155' 900' 644' 828' 1/3 紀上 322' 肥伊 尖 宇治谷 168' 902' 1/2 14行

小林 1080' 心 駕

902' 1/2 14行

口 目 示 豊 浦 (あをり) へ 行 ぎ、私 と お ち あ う よ う に

た だ ち に、そ の 津 を 出 発 し て、穴 門 (山)

仲 哀 天 皇 は、使 者 を 檀 日 入 遣 り 出 せ、皇 后 へ

を 激 励 す る こ と に さ れ た。ま た 船 出 す る そ の 日 に、

戦 線 で、激 し い 鎧 迫 合 い が 突 発 し た。

仲 哀 天 皇 は、す ぐ さ ま 国 境 へ 急 行 し て、兵 卒 達

と ころ が、そ の 時、ま ま ち や 東 の 国、口 拘 奴 国 比 と の

貢 し な か っ た の で、熊 襲 国 を 討 と う と さ べ た。

所 謂 肥 伊 (火 色) 八 代 地 方 へ お い で、な り

徳 勒 津 宮 に 居 ら べ た。こ の 時、熊 襲 が 叛 いて 朝

地 へ 巡 幸 さ べ た。仲 哀 天 皇 は、二、三 人 の 卿

太 夫、お よ び 官 人 数 百 人 と と も に、紀 伊 国 に 相 当 す る

同 年 (仲 哀 二 年) 三 月 十 五 日、仲 哀 天 皇

は、皇 后 を 檀 日 宮 に 残 し、倭 国 の 極 南 界 の

周 芳 の 沙 塵 へ

米

筆 に ま か せ て、書 き 進 め て み た い。

大 登 場 す る 答 案 等 がある ま い と 思 わ べ り。(第 3 表 参 照)

\* 以下、記 紀 の 竹 簡 書 き と は 様 相 を 異 に す る が

紀上 323 注17





紀上324 6行

949' 826' 900' 6行

ての 手強 1525' 902' -1/2

ある川 902' -1/2

「てて」 886' -1/2 932'

紀上324 123 地名 1000' 上 日本 464' 神社

紀上324 3行

皇太后は、香椎を突って、能古島と志賀島との間を通り、穴門の豊浦津に至られたのだ

九月に宮室を穴門にたてて住まわせた

今、山口県豊浦郡長府町豊浦(関門海峡の東端域北岸)の忌宮神社の地に、伝豊浦宮跡がある(日本社寺大観「名著刊行会」忌宮神社)他参照

仲哀天皇・皇太后を戦場の間近かに迎えて、兵達はふるい立ち、いよいよ果敢に戦ったに違いない。

しかし、拘奴国は「なかなか手強い相手だった」

もしかしたら、仲哀天皇は、穴門豊浦宮から戦場の最前線である周芳の沙彦(今の山口県防府市佐波)の地にまでもおもむいて、兵の士気を鼓舞されたのかも知れない(第19回「佐波郡」仲哀紀八

年正月四日条参照) (日本書紀) (山日本書紀) (山日本書紀) (山日本書紀) (山日本書紀)

なお、周芳の沙彦(防府)は、東西方向に長い山口県南岸のほぼ中央部に位置してお

り、穴門豊浦宮(関門海峡東端域北岸)

穴門豊浦宮(関門海峡東端域北岸)

阿曇氏の本拠地

902<sup>p</sup>-2/2

九州  
紀上287°注30  
286°未折

前線  
基地 1269°  
537°  
紀上324°69°

「防府」  
「防府」

の長府(ちやうふ)から東へ約五十五(ごじゅうご)のところにあ  
る。

• あるいは下

山口県と広島県との境(さかい)あたりに国境があ

り、周防(すべ)の防府(ぼうふ)に、倭国(わこく)

の最前線(さいぜんせん)基地(きち)が置(お)かされてきた。

の(は)なかろうか。(「日本書紀」(上)日本古典

文学大系、岩波書店、二八七頁、三三〇〜九

州(しゅう)征討(せいとう)の前進(ぜんしん)基地(きち)として、周防(すべ)の斐(ひ)屋(や)屋(や)参(まゐ)り

照(しょう)

• すなわち、

本来(もと)は周防(すべ)の防府(ぼうふ)は、中国(ちゆうごく)・

近畿(きんき)地方(ちゆうほう)征討(せいとう)の最前線(さいぜんせん)基地(きち)であつた。

にもかかわら(か)ず、日本書紀(にっぽんしょき)の編纂者(へんさんしや)が、あえ

て事実(じじつ)をゆかめ下

へ、周防(すべ)の防府(ぼうふ)は、九州征討(しゅうせいとう)を

行(おこな)う場合(ばあひ)の前(まへ)進(しん)基地(きち)であつた。

か(か)のように書(か)きしる(し)たの(の)だ(だ)ら(ら)う、と(と)思(おも)は

る。(既述(きじつ) )

(\*)

紀上324 大 十 振 類又 905 末 907-1/2 紀上324 車駕 900' 899' 10' 899' 903' 改行 紀上324 3行

かいたん 元500' 間断 同のとき 4829' 20行

ハヤが尺瓊を中のかけて、十握の沙磨の浦にお出  
 神(さかき)を船(ふね)の舳(うしほ)に立(た)て、上(う)の枝(えだ)には白銅鏡(はくどうきやう)を  
 祖(そ)でそのとき熊(くま)は、岡(おか)県(けん)主(しゅ)岡(おか)は地名(ちめい)遠(とほ)賀(が)郡(ぐん)の  
 ち、筑紫(つくし)に行幸(ゆき)さる(こ)とに遠(とほ)賀(が)郡(ぐん)の  
 の最前線(さいぜんせん)沙磨(さま)山口(やまぐち)県(けん)防府(ぼうふ)市(し)佐波(さな)を後(あと)に  
 て、仲哀(ちゆうあい)八年(はちねん)正月(しょうげつ)四日(よっぴ)仲哀(ちゆうあい)天皇(てんかう)は、この戦場(せんば)に  
 あり、仲哀(ちゆうあい)七年(しちねん)末頃(まつころ)戦(いくさ)いは一(いち)元(げん)平(へい)衡(かう)状(じやう)態(たい)  
 にあり、たつまり東(あづま)の国(くに)の猛(もう)着(しやく)共(ども)を追(お)い払(はら)い  
 静(しず)かな睨(にら)みあいの情(じやう)況(きやう)となつ  
 いて記(き)すゆけに、いかなかつた、  
 からのな、仲哀(ちゆうあい)七(しち)年(ねん)末(まつ)頃(ころ)と推(おぼ)えらる(ま)る。元(げん)平(へい)衡(かう)状(じやう)態(たい)  
 とはいえ、仲哀(ちゆうあい)七(しち)年(ねん)末(まつ)頃(ころ)と推(おぼ)えらる(ま)る。元(げん)平(へい)衡(かう)状(じやう)態(たい)  
 情(じやう)に、お、記(き)紀(き)の編纂(へんさん)者(しや)達(た)は、この五年(ごねん)間(かん)の事(こと)  
 まで、続(つづ)りていつたのであろう。  
 戦(せん)闘(とう)が、恐(おそ)らく、五年(ごねん)後(ご)の仲哀(ちゆうあい)七(しち)年(ねん)頃(ころ)に  
 仲哀(ちゆうあい)二(に)年(ねん)以(もつ)降(こう)間断(かんたん)なく、返(かへ)り返(かへ)され、激(げき)しい  
 香椎宮(かすかひのみや)への帰還(きかん)東(とう)西(せい)二(に)国(こく)間(かん)の

紀上 609' 326'

元 516'

東西二国間の

由859-1/2 1655

902P 『ヒコウデ』 50...  
879P  
915P  
904P

改行

改行

紀上322P

『ヒコウデ』  
889P  
923P

紀上324P 655

迎えし、海路をお導きした。

とこころで、仲哀紀二年条 同八年条の記述

の通りに読むならば、  
仲哀天皇は、角鹿(敦賀)の筭飯宮から

伊国へ行き、さらに熊襲を討つたために船で穴

門の豊浦津(山口県豊浦郡長府町豊浦)へ至

り、この地で皇后と再会された。

五年間程の長い間、天皇・皇后は穴門豊浦

宮(関門海峡東端域の宮)に留まっておられた

という筋書きとなる。

そのなかに、どうした訳か不審にもなから

穴門から熊襲へ行く方向とは正反對の、周

の沙摩(山口県防府市佐波)に天皇はおら

れたというので、仲哀紀八年正月四日条参照

何故、熊襲人の道筋になり、周芳の沙摩に天

皇が行っておられたのか不明であり、奇妙に

思われる。

しかし、すでに述べた通り、

へ倭国の最も東のはずれにあって、拘奴国

と接していた国が、句奴国(周芳の沙摩)

と接していた国が、句奴国(周芳の沙摩)

33 紀上324P 1055 900P 855 902P 1/2 1455

凡地記 503P 五十五(五)年 船首 船の長さ 1619 船の長さ 769-3/4 船の長さ 324 船の長さ 914-3/4 船の長さ 966 船の長さ 322 船の長さ 323 船の長さ 324 船の長さ 905 船の長さ 901-1/2 船の長さ 459 船の長さ 690 船の長さ 686 船の長さ 903 船の長さ 859-3/2 船の長さ 1659

船首および船尾(広辞苑)に立て、上の技には八尺瓊を

船首および船尾(広辞苑)に立て、上の技には八尺瓊を  
 の敷木(櫛)を抜取って、自らの船の舳舻  
 た筑紫の伊都県主の祖である五十跡手が、五百枝  
 そんな時、天皇・皇后の行幸のことを聞き知つ  
 んで、たように思わゆる。相前後して  
 右の乗る船との二艘の船が、檀日宮へと進  
 穴門からは仲哀天皇の乗る船と、皇  
 の豊浦津に着いた。先導され、皇后が居られる穴  
 周芳の沙磨を突った仲哀天皇の御船は、熊鷹の船に  
 阿海峽の東端北岸

を中心とする国)だったのであろう。と  
 と観察される。第25章「姐奴国」参照  
 仲哀天皇は、仲哀二年頃から同七年頃まで  
 の約五年間、その最前線地域に自らの身を置  
 いて下知しておられた。と考えてみた  
 米

紀上326P  
凡上503P



凡上  
965 1/2

906P-1/4

凡上260P5行  
あめのひば  
天日槍

凡上503P注23  
紀上325P

天日槍

類文966P

903P  
引島

紀上325P注30  
凡上503P序島とある

紀上326P  
25行

かけ、中の枝には白銅鏡をかけ、下の枝には  
 十握剣を掛けて、穴門の引島（下関市彦島）  
 にお出迎えし、二本の賢木を天皇と皇后に献  
 じた。第一表（五十跡手）参照）  
 天皇は形式にのっとり、「お前は誰か」と  
 お尋ねになつた。その跡手は、かこまり、  
 高麗の意呂山（朝鮮東海岸の蔚山）  
 新羅と高麗（三韓時代の高句麗国）との境の  
 地方であるから高麗国と言つたのである  
 天より降り来し日槍の苗裔、五十跡手と  
 いふ者でござりまする  
 と申し上げた。（仲哀紀八年正月条。筑前国  
 風土記逸文八拾二郡）条参照第八章（天日槍伝説）の  
 ミニコト、五十跡手はさらけに、  
 私か、進んでこの物を献上するわけは、  
 天皇か、八尺瓊の勾つた玉のような形をして  
 いる倭国（九州）の中央にあつて、  
 宇をお治めになり、また白銅鏡のようには  
 っきりと山川や海原を御覧になり、そしてこ

887<sup>p</sup>-1/3  
411-278<sup>p</sup>  
281<sup>p</sup>-1/2  
けいふ 系譜 680<sup>p</sup>  
1493<sup>p</sup>

609<sup>p</sup>の系図  
906<sup>p</sup>-3/4  
130<sup>p</sup>

姉か妹か分らない  
紀上 330  
紀上 269, 278, 609  
899<sup>p</sup>35<sup>p</sup>  
160<sup>p</sup>3<sup>p</sup>  
ヤム能裏(貝書於國)由 900<sup>p</sup>12<sup>p</sup>  
新羅王の天孫 天孫 天孫

紀上 326<sup>p</sup> 3<sup>p</sup>

の十握剣をお帯びた  
天の下(拍収國)  
と願うから

とござりますし

天皇は、  
非常にお喜びになられた。  
(仲哀紀)

八年条参照)

なお、天日梯の苗裔である日五十跡手らと

葛城高額比売命(神功皇后の母)とは、

非常に濃い血縁関係にあつたのであろう、と

推察される。(第一表参照)

以下、「日本書紀(上)果草史」学大系、岩波書店、六〇九頁

仲哀天皇の皇后である日神功皇

后(息長帯比売命)の系図を見てみよう。

①神功皇后の父日息長宿禰王の系譜は、開

化記によると、系図一に示すとおりである。

もつとも、息長宿禰王の本来の系譜と、開

化天皇の系譜とを、どこかで無理に繋ぎ合

せているのを見ようと思われ、詳細は

と分からない。序論(日本書紀の記載における)

②神功皇后の母日葛城高額比売命の系譜は

天孫記、垂仁紀三年三月条、および筑前国風

⑧887<sup>p</sup>-1/3  
11<sup>p</sup>同文  
小た約(東事)冒頭(系譜のすり替え)参照

907<sup>p</sup>-1/2 5<sup>p</sup>  
田道間守の孫か

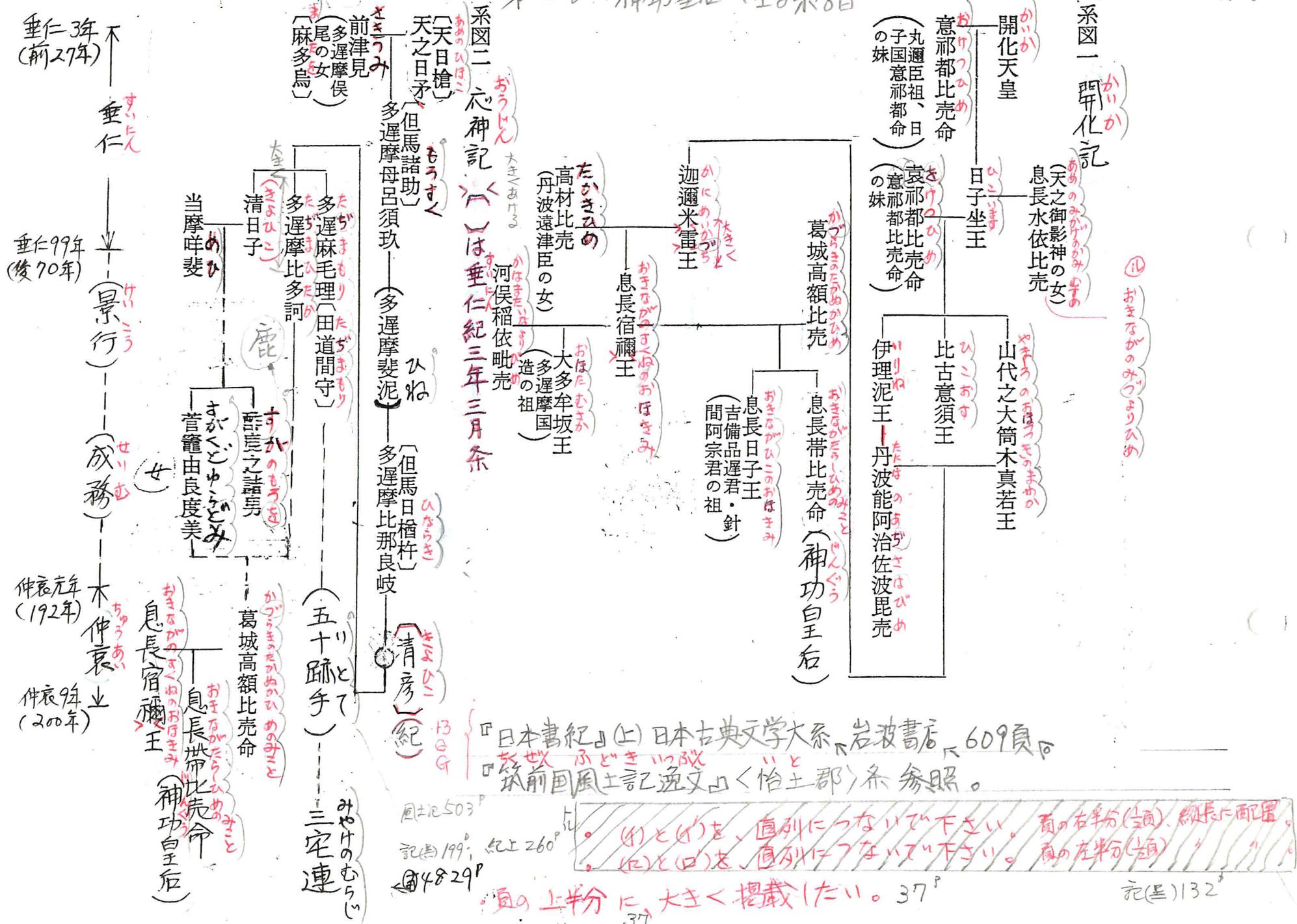
④ 770<sup>1-2</sup> 伊都都比古 3241-24 ④ 920<sup>5</sup> 伊都都比古

④ 770<sup>1-2</sup> 伊都都比古 3241-24 ④ 920<sup>5</sup> 伊都都比古

1589 906<sup>1-3/4</sup> 神功皇后入系譜

記(皇)130<sup>1</sup>

第1表 第6表 神(1)-110<sup>7</sup> 大山津見の系譜



土記逸文へ怡土郡✓糸を結び合わせると、系  
 図二のようになる。と想像される。  
 四 それにしても、心神記は、  
 八 垂仁朝末(西暦七〇年)頃の人(多た)  
 遅摩比多詞(田道間守の弟)の孫娘が、  
 何と、約一二〇年後の仲哀天皇(在位一九二  
 二〇〇年)の皇后日神功皇后(弟)である。✓  
 トル 図のようには本と述べており、異様である。弟  
 表参照) 一 かしなから、  
 儀式へ 田道間守の殉死以降、倭国風の襲名の  
 子孫達も長寿を保つようになり、天日槍の  
 結果、心神記に示されてゐる系図になった。✓  
 田道間守の推察される。  
 多詞 および清日子の襲名が、次から次へと続  
 いていったので、心神記に述べられてゐる  
 多遲摩比多詞、その姪由良度美(清日子  
 の娘)を娶りて生める子、葛城え高、額比売命  
 ニは息長帯比売命の御祖と  
 祀(皇)199 未詳  
 解

風出P  
503<sup>P</sup>

紀上 324<sup>p</sup>

⑨ 903<sup>p</sup> 末 904<sup>p</sup> 2行

④ 4829<sup>p</sup> - 1/2

紀下 388<sup>p</sup> 907<sup>p</sup> - 1/3

紀上 280<sup>p</sup>

④ 4829<sup>p</sup> - 1/2

⑨ 910<sup>p</sup> = ニニに参考迄に記せば

因みに記すと

⑨ 914<sup>p</sup> - 3/4

凡て記 503<sup>p</sup>

⑨ 906<sup>p</sup> - 3/4 7行 天日尊の苗裔

ニ

と  
いうこと  
になる  
のであ  
らう。

定かでないか

天より降り来し日杵の苗裔、五十跡乎

(筑前国風土記免)

とは、多摩麻毛理(田道間守)の直系の子孫

の意味なので、はなからうかと想察される。(第一表参照)

参考までに述べると、

(1) 垂仁紀、垂仁記に、

「田道間守は是、三宅連の始祖なり」(垂仁紀末)

「三宅連等が祖、名は多摩麻毛理」(垂仁記)

と記されてゐる。(第一表参照)

天武紀元年(六七二)の壬申乱の条には、

「国司宇三宅連石床」

とある。(第一表、第八十五章において、思うところを述べたい)

仲哀天皇の御船と、皇后の御船の二つ

の船か、あり連らなつて、引島(彦島)から

西の方へと少しばかり漕ぎ進んだ時、

周茅の砂麿から先導してきた国具主

の祖である熊鯨が、

「一興をお見せ致しませう。旅のおなぐ

え 1654<sup>p</sup> ながまめ ながさみ

和和 998<sup>P</sup>  
地産長 (一谷)

改訂  
863<sup>P</sup> - 2/3  
20行下

907<sup>P</sup> - 2/3

1610<sup>P</sup>

紀上190<sup>P</sup>  
注15

紀上324<sup>P</sup>  
宇治谷上190<sup>P</sup>  
初冊26<sup>P</sup>

紀上501<sup>P</sup> 紀上324<sup>P</sup> 105行  
一興129<sup>P</sup>  
八更171<sup>P</sup> = 7  
紀上325<sup>P</sup>末

さあみ になるかお知れませんし  
 と申し出た。(以下、仲哀紀八年条。筑前国  
 風土記逸文へ塙船水門) 条参照  
 若松区岩屋崎) の北岸路いに遭き進んで、岡  
 水門 (福岡県遠賀郡蘆屋町遠賀川河口付近) 入  
 と至った。(以下、第227回参照)  
 名) の内方に江湾が広がっていて、海水深く、大  
 船帯なく上下していったという。(「帝国地名辞  
 典」名著出版、岡水門) 参照  
 仲哀天皇は、この遠賀川河口の大きな江湾内に  
 入って下り、皇后の到着をお待ちになつ  
 た。  
 一方、皇后の乗る別の船は、洞海 (洞海湾)  
 に入り、その奥深い入江の西方、奥へ奥へと  
 進んでいった。ところか次第に、潮が引き下  
 った。ついに進退不能となり、出来なくなつてしまつた。  
 皇后につき従つていた人々は、どうしてよ  
 のか分からず、オロオロするばかりだつた。

- ・ 枠不要。
- ・ 第二卷(第三章)5頁と同様の  
カラーにておいて下さい。
- ・ 限度一杯大きく掲載したい。(頁の上半分)

907<sup>P</sup> - 3/3

同図前  
(4871 - 2/4)



たりのやなぎ  
大里・柳  
4871末

1484 第227図 洞海湾(洞海)・彦島・関門海峡一帯の地形図(想像)

1289  
○は、史跡です。  
(洞海湾の南)

昭和42年4月30日付、国土地理院発行の5万分の1地図「折尾」「小倉」。

『北九州の旅』北川富志、旅研社、1966年10月発行、71頁

『福岡県地名考』梅村孝雄、海鳥社、2003年4月、第3刷発行、178頁(縄文時代の状況を示しているところを参照)。

(第4巻) 41

紀498<sup>p</sup> 207<sup>p</sup> 長良川の戦い 3337<sup>p</sup> 2/3 908<sup>p</sup> 909<sup>p</sup> 3/3 小林 567<sup>p</sup> 狭長 630<sup>p</sup> 江川 578<sup>p</sup> 紀上 324<sup>p</sup> 小林 569<sup>p</sup> 奥深い 1314<sup>p</sup> 洞子

改訂

とある。また隋書倭国伝に

●神武紀に日養廬部曰字介辟曰(鵜飼)

有知水ない。

か、もしかしたら曰鵜飼のことであつたか

お解けたなつたと伝える。(仲衣紀「八年正月条参照

ところまで魚島の遊びは一定かでない

七頁巻腹

こーして、皇后のお怒りの心が、ようやく

お見せした。今も洞海湾の奥あたり大魚島

魚沼・鳥池を作り、皇后に魚島の遊びを

取に入るばかりに恐懼しつつも、即座に

熊鷹は、皇后の御船が進まないのを見て、

めた急いでやってきたのだ。た。帝国地名辞典大田

を運河のような水路を東進し、今の大鳥居

遠賀川河口と洞海とをつなりでいるこの狭長

川と叫ばれる水路へ乗り入れた熊鷹は、

ら現れた。(漢和辞典「小林信明小学館」洞参照)

そんな時、熊鷹が突然、洞(奥深い方)か

東

紀上 324<sup>p</sup> 末2  
小林 569<sup>p</sup>  
奥深い

大田の  
1314<sup>p</sup>  
洞子

前漢 1260 新南のテレビ探 雲南の地後  
前202〜後1 / やまの物 (録) 100 ほどに貼布

909P / 3  
即

「参考資料」 907-1/2 頁 1260  
鶏 1315 本橋 2058  
水の中に浮き上がり、谷の底に落ちる

素朴 1315  
H18(2006)8.26 鶏 1315  
云 1523

頭を得し、水に入りて魚を捕えしめ、日に百餘  
 と記されておられ、我國の鵜飼の歴史は  
 さいぶん古いように見受けられる。  
 一方、中国雲南省には、現在、鵜飼によつ  
 て生計を立ててゐる人達がいるといふ。(昭和  
 五十九年九月十一日へなるほどザ・ワールド  
 関西テレビ)  
 おそらく、周・秦・前漢のころすでに、江  
 南の地において鵜飼が行なわれていたであらう。  
 江南の人々の生活に密着した鵜飼が、崇神天皇  
 の前九七年ころ日本列島へもたらされた儀式化  
 された、倭國の貴族のわゆる華族達の間でも  
 てはやされたのに対して、本場の鵜飼の中  
 国では、昔ながらに生活の為に鵜を使  
 して魚を捕らへてゐるのあらうと想像される。  
 雲南地方の鵜飼においては、首に紐  
 をつけていない数羽の鵜(首輪をつけては  
 ない)を船のまわりで自由に替らせ、  
 かんではいる鵜を次々に掴みあげ、  
 際なく魚を吐き出させており、なんとも素朴  
 で微笑ましい。(写真因版 198 参照)

大分 639P  
 大分 2556  
 大分 2552  
 大分 2439

・カ-  
 ・夏の上粉に  
 載せて  
 下さす。

909<sup>p</sup>-2/3



中国のミヅノハーパー 日経ラジオ社 ミニシアター社 2001年7月27日発行 282頁 参考  
 桂林丘陵で「鶺鴒飼いはお漁師」  
 鶺鴒の首は、大きき魚を呑み下せをいぶらた「紐」で縛る。  
 鶺鴒は、魚をくわえるヒヤ袋を持ち、7束をいぶらた仕立 作り7w30

③3376 長良川の鵜飼 ③3358<sup>20</sup> 909<sup>3</sup>-3/3

③908<sup>20</sup>

社「七一頁参照」

中国では、雲南省のほか、鴨緑江の一部、  
 吉林省の松花江、揚子江沿岸（特に四川省）  
 福建省などでも鵜飼が見られるという  
 〔世界大百科事典〕(3)平凡社「一九七二年  
 四月二五日初版発行」鵜飼参照  
 能鱔が作った魚沼は、鳥池は、  
 どんなものであったのだろうか。（不明）  
 鳥池は「首た紐」をくりつけた多数の  
 鵜をまとめて入れ、船上に置かしている。鵜飼のたぐい  
 のもの、皇后が乗るおろゆる船の提灯をみる  
 種々考えられるもの、  
 粟は思ひ浮かばない  
 川に放たれた鵜が船の上へ引き上げられ、  
 咽から吐き出した小魚が桶の中で元気に  
 泳いでいるのを見るのは一興であろう。  
 現在、洞海湾の奥あたりに「魚島  
 池」があるという。（「北九州の旅」旅研

③907<sup>20</sup>-3/3 地田

こと 凡て501<sup>P</sup>

紀上324<sup>P</sup>末2<sup>P</sup>

紀上325<sup>P</sup>3<sup>P</sup>

河上908<sup>P</sup>15<sup>P</sup>  
910<sup>P</sup>

凡て501<sup>P</sup>  
地名579<sup>P</sup>

江川908<sup>P</sup>3<sup>P</sup>

紀上324<sup>P</sup>末2<sup>P</sup>

天竺(微笑) 2048<sup>P</sup>  
H18.8.26 TV84ヤサキ  
A. (40:3) 西テレビ

ル長柄川の川口... 述べらる。  
水中で魚を口にしわせた鵜は...  
平家十八年八月二十六日午下(参考) 魚の鵜を...  
お乗せする

朝が満ちた時、皇后を乗せた船は、さうに  
洞海の奥深くへと入っていった。  
この水路の向うの方で、大王がお待ちになつてお

うれますし、御船をはじめとする  
数多の船を従え

北と南の丘陵地の間を縫うように西進し  
賀川の河口(今の「大君」という所あたり)

賀川の河口(今の「大君」という所あたり)  
賀川の河口(今の「大君」という所あたり)  
賀川の河口(今の「大君」という所あたり)

熊鷹の住む岡津に御案内され、お泊りにな  
つた。(仲哀紀八年正月条参照)

なお、  
洞海と遠賀川河口とが、細い水路でつな  
がっていた。

条は、次のように述べている。  
筑前国風土記逸文、塙舸水門

風土記に云はく、塙舸の縣。縣の東の側

坂9<sup>P</sup>待つてお34<sup>P</sup>↑46<sup>P</sup>

待つ 坂9<sup>P</sup>

かひのうら  
檀日宮 紀上334 7斤

ぬたのと  
淨田門 由901-1/2

911P-1/2

くま  
山門地名 578

408抄62頁 凡地501 注20

紀上326 5斤

地名 276

近く、大江の口（遠賀川の河口、古くは入り込んで洞海湾に通じていた）あり。名を嶋（か）の水門と曰ふ。大船を容るるに堪へたり。彼より、鳥（洞海湾内の北寄りの島で旧島郷といつた）、鳥旗（戸畑）の奥に通ふ。名を岫門（市の方へ抜ける水路。遠賀川の河口から戸畑に堪へたり。云々）

そして、仲哀天皇が皇后を待用になつて、おられたと思われ、遠賀川河口の東岸あたりに大君一という地名があつて興味深い。

山（が）あつて、平家没落のとき山鹿秀遠が安徳天皇を迎え奉りし所との言ひ伝へがあるといふ。

行会へオウキミヤマ（）

仲哀八年正月二十一日に、天皇と皇后とは難縣に到らぬ。檀日宮を居所とす。水た。紀

周芳の沙塵から西行した船は、

賀鳥と能古島との間を通り、奴国を経て不彌国の檀日宮に至つた。と考へらる。

檀日宮  
難縣  
賀鳥  
能古島  
周芳  
沙塵  
西行  
不彌国  
檀日宮

北

コクヨ ケー20 20x20

かひのうら  
紀上334 7斤 922 1/2 4斤 檀日宮

911<sup>P</sup>-2/2

地名辞578<sup>P</sup>

下12/15  
12/5

とある。

また、日 帝国地名辞典に太田為三郎の名著  
 刊行会五七八頁へ洞海には

仲哀天皇筑紫行幸の時、御舟は海路山鹿  
 甲を廻りて岡湊（今の芦屋浦）に至り、白土  
 の別舟は洞海へ入り江川を経て岡湊に会せ  
 事仲哀紀に見ゆ

と記されている。

2018.12.15  
907-2/2

57. 10. 23

912P

紀326 大坂の白塗 7月17日 1922  
踐立 945P 16行 1929P

後文に、徑吉三神あり  
「檀田の傳」にては99x

↑上げるかみ  
神の教え

仲哀 八年(一九九九)九月五日  
宮に群臣を集め 熊襲(珠磨・贈啖) 天皇は香椎  
討つて協議された。

だが皇后は、その企てに、あまり気が進ま  
ないお氣持ちを持つておられたのであろう。  
皇后は、神託(神の託宣)を  
お告げになつたや

大王よ。あなたはどうして球磨・贈啖が  
こは、荒れはてた不毛の土地なのです。  
げで討伐する価値はありません。その国より  
もまさた宝のある国が津那津に向い  
て、海の南に横たわつてゐるではありません  
んか。こ水さ、辰韓(後の新羅)とい  
ます。

もうよく私を祭つたならば、  
塗土(土)をすく  
その国は必ず自然に  
刃に血

大王の御船と穴門直踐立か献上した水田とは  
服従するはずです。その祭りに当つては  
服属してくるでしよう。また、球磨・贈  
啖も服従するははずです。その祭りに当つては

945-1/2 16行

紀上192 神(徑吉三神)の津那味 紀(下)58P 49  
も、那津である。



1517  
紀上340  
注4

月条の異伝(参照)

この長大な尊の名の表記は異様であり、古

来、次の三つの解釈がある。

・第一は、天照大神とする説

・第二は、事代主神とする説

・第三は、住吉三神とする説

である。(「日本書紀」上)日本古典文学大系

岩波書店、六一三頁(参照)

※この物語において、第一の天照大神とする説をとりたい。

なお、

「速狭騰尊は」(万巻二一六七に)注記し

て、天照日女之命の一名とする指上日女之命

と同一だと(谷川士清「七〇九と七〇六」著)

と通証(はいう)。(日本書紀「上」日本古典文

学大系、岩波書店、六一三頁、補注九一―一四

参照)

も「かいたら、

①太陽が天空に昇ることを、日速狭騰と称

した。

次頁7行



速狭騰  
①2000

なるほ

914<sup>P</sup>-3/4

30

参考までに  
復9所

紀上340<sup>P</sup>

「時に神、其の名を稱りて曰はく、曰表簡雄。中筒雄。辰筒雄。如是三の神の名を稱りて、曰はく、曰吾が名は、向匱男。聞襲大歴五御魂速狭騰尊なり」とのたまふ。時に天皇、皇后に謂りて曰はく、曰聞き悪き事言ひ坐す婦人か。何ぞ速狭騰と言ふ。曰とのたまふ。とある。(神功皇后摂政前紀の仲哀九年十二月余の異伝参照)

因みに述べると、速狭騰(天に騰る)とは死することを感じていりるので、天皇が皇后を難いられたのであろう。(本居宣長「一七三〇〜一八〇〇」著)

古事記伝はいう。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系、岩波書店、六一三頁、補注九一回参照)

恐らく、仲哀天皇は、曰速狭騰と聞いて、曰死すを連想された。

と、いうことなのであろう。仲哀天皇は、皇后の語る神の言葉をお聞き



「小町」37P~38P上1行  
24=12  
96P

規 當 73 手 當 かい 釘 介 抱 の 治 療 手 當 7 915P  
57.10.23(日)

た ぶ 立 ち 登 がる 云 1379P  
お か う ち 迎 え 撃 つ 2143P  
紀 上 328P  
「還 村」紀 上 328 15行  
「その 志」913P  
紀 上 328P 904P  
920P

を 隠 して	皇后(神功皇后)と大臣武内宿禰は、	天皇の喪	哀 九 年 二 月 五 日 糸 の 異 伝 参 照	の 翌 日、	天皇はお崩水になつてしまつた。	群 臣 ら の 必 死 の 手 当 だ の か い も な く、	そ の 受 け た 天 傷 は あ ま り に も 深 く	に 才 賊 の 放 った 矢 が 天 皇 の 玉 体 に 刺 さ っ た。	仲 哀 九 年 (二 〇 〇) 二 月 五 日 の こ と 不 運	水 た の だ っ た。	天 皇 御 自 身 が 立 ち 塞 が り、	討 伐 の 指 揮 を と ら	へ と お 還 り に な り、	敵 を 迎 え 撃 た 水 た。	東 の 国 境	ら せ が 相 つ い た。	境 界 を 侵 し て	い る と い う 知	奴 国 凸 が さ か ん に	境 界 を 侵 し て	い る と い う 知	と こ う が そ ん な と き、	い ま ま た 東 の 国 境	仲 哀 天 皇 は、	親 ら 熊 襲 討 伐 に 出 立 さ 水 た。	仲 哀 天 皇 崩
--------	-------------------	------	---------------------------	--------	-----------------	----------------------------------	-------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------	--------------	------------------------	-----------------	------------------	------------------	---------	----------------	-------------	-------------	-----------------	-------------	-------------	--------------------	-----------------	------------	--------------------------	-----------

大いなる力により天下に知らせ

改行 この行、太いゴ4  
初代しよだい 天照大神あまてらすかみ  
改行 この行、太いゴ4 9/16 P

「お前水」前頁16行  
改行  
と

■その水は、仲哀天皇に、男の御子があつたからに他ならなかつた。  
・仲哀天皇の位と名と年とを、その御子が受け継ぐのは、この当時、自明の理なのであつた。  
・仲哀天皇は決してお亡くなりになつたといふわけではない。  
「倭王は、ほ人のちよつとの間、お隠水になつておられるは、なるだけのことなのだ。」  
\*そこで、天皇の喪は隠され、天下に知らぬやうなことはさせなかつたのであろう。  
■尚、この物語においては、仲哀天皇と皇后との間に、次の三人の御子があつたと解釈して見たい。(第一表参照)  
①長女、卑彌呼(日御子)  
・~~おける~~天照大神。仲哀天皇と初代神功皇后との間に生れ、初代神功皇后の名と年とも受け継ぐことになる。二代目の神功皇后(春の天照大神)の長男、天照大神の男弟月読尊。初代神功皇后が朝鮮半島への出陣から帰還された後、母の姿をした高塚式墳墓の岩戸の石(腰石)

162  
918'15  
紀上 336 末6行

ケ-20 20x20 紀上89 2行

後頁1次頁12行

初代神功皇后  
56

前頁20行

三

917<sup>P</sup>

魏文侯53

「か」の頁2行

956<sup>P</sup>  
3825

914<sup>P</sup> - 3/4 65<sup>P</sup>

③ 次男... 神代紀における素戔嗚尊・卑彌呼  
 の死後、一時、倭国の王(男王)となる。  
 だが國中服す、更々相誅殺し、当時千餘人  
 を殺すほどの内乱となる。素戔嗚尊は、捕え  
 られ、やかて出雲国(国譲り以前の出雲国  
 現存の近畿地方)へ降ってゆく。

と仮定し、話を進めてゆきたい。

\*

我国の朝廷においてはこの上なく死  
 や口けがれを忌み嫌ったようである。

そこで、倭王をはじめとする支配者達

エ 1745

トル

エ 141

王(男王)

13.8.18(日) 沙塵 905 井上(2)上 288 918 紀上328 兵卒 1987 916 己む 150

命絶えたとき、横穴式石室内へ隠れ、  
 戸の儀式によつて生水出て、こらして次  
 々に生水替り、長命を保つ。夫のたうま(既述)  
 とりう日襲名、の思想を、殊更大切に継承して、  
 たり、また、倭王の崩御の事実が天下に知れ  
 たなら、倭軍の兵卒達の士気に影響し、国外  
 の賊達をふるいたたせることもなろう。  
 はならなり、と考えられたのだった。  
 ここに皇后は、檀日宮に、大臣(武内宿禰)  
 中臣烏賊津連・大三輪大友主君・物部膽咋連  
 大伴武以連に詔し、  
 「いま天下は、まだ大王がお崩れにな  
 ったことを知らな。もし百姓が知ったなら  
 は、懈怠があらう。」  
 と仰せられた。そして、四人の大夫に命じ、  
 百寮を率いて、檀日宮中を中らせになった。  
 一、皇后の命によつて、武内宿禰は天皇  
 が崩れられた激戦地(沙塵)へ赴き、ひそ  
 かに天皇の御屍を収め、海路をとつて穴

145P  
 354P  
 ニヤミタラたせつ

916新

紀上  
 328  
 917

紀上 328<sup>?</sup>

穴門 紀上 323<sup>?</sup> 注り

紀上 328<sup>?</sup> 919<sup>P</sup> - 1/2

新羅征討 715<sup>?</sup> 2月6日 死去

井上 紀(上) 288<sup>P</sup>

915<sup>?</sup> 仲哀 9年 (200) 2月5日 死去

紀上 328<sup>?</sup>

紀上 328<sup>?</sup> 105<sup>?</sup>

20

20

902<sup>?</sup> 1/2 617

31

門(長存) お遷(うつ)した。そうして豊浦宮で  
火をたくと

ころを、秘密のためたかめ(こと)をした。

甲子(二十日)に、大臣武内宿禰は、穴門

から檀日宮へ帰還して、皇后に復奏した。

是の年(仲哀九年(二〇〇年))には、新羅の役(い)わ

ゆる新羅征討)があつたから、天白王を葬り

まつることは行なわなかつた。

号水にても、仲哀紀の記載を鵜呑みにす

ると、博多湾東部の南の(球)贈(お)給(お)す

へ大臣武内宿禰は、檀日宮から熊襲へ赴き

仲哀天皇の屍を収めた後、日向灘にお

よび豊予海峡を通り、穴門(山口県の豊浦郡)

へ遷り、豊浦宮で殯して、号水から檀日宮へ

帰還した(武内宿禰は九州を一周した)

ように見受けられる。沙摩から

いかし、この物語では採用しない。

H18(2006)8.22(土)④  
 H30(2018)2.3(土)~2.5(5回)  
 令和元(2019)5.15(水)~5.16(3回)  
 令和元.12.16(月)~12.19(4回)  
 令和2.8.20(木)~8.21(4回)

919<sup>P</sup>-2/2

式部、式部省の略及②-153° 紀上609補註8-4  
 抄し、抄の元

8/21  
 8/20

\*

後の二座をまつつている。  
 日本古典文学大系、岩波書店、六〇九頁、補  
 注ハ―四参照)

れているので、神社と山陵の取扱いを兼ねて

いたようである。  
 香椎宮と仲哀天皇・神功皇

また、延喜式部式に「香椎宮守戸」が記さ

あり、任吉神代記に「檀日廟宮」延喜式部

檀日廟宮とも稱したるは、檀日宮の香

紀上 326.65  
 紀上 326.65

檀の廟